

# 世代間関係における非対称性の再考

## 日本の親子関係は双系的になったか？

施 利平  
(明治大学)

Reconsideration on Asymmetry in Intergenerational Family Relations  
- Have Japanese Parent-Child Relationships Become Bilateral?  
SHI Liping

本稿の目的は、既婚子とその両親との関係について、同居は息子（主に長男）と、援助や交際は娘との間で行われる傾向を、最新の全国データで検証するとともに、これらの現象を同時に説明できる理論または仮説を提示することである。NFRJ03 のデータにより検証した結果、居住は息子、主に長男との間で行われる一方、援助やコミュニケーション活動は娘との間で活発に行われていることが確認された。本稿ではこれらの現象を、家族制度や親族規範の変化によって生じた新しい兆候と捉えるよりもむしろ、直系家族制度や親族規範が今もって持続しているためではないかと考える。息子とは同居によって親子間の相互扶助の機能を、娘とは援助や交際を通して情緒的安定や連帯の機能を果たすことは、まさに直系家族制度に合致したものであるとの解釈を試みた。

キーワード：親子関係、非対称性、家族・親族の変容、同居、相互援助

### 1. 問題意識

既婚子とその両親との関係について、矛盾する議論を同時に見受ける。一方では長男規範が強く、長男との同居率が高いことが多くの研究（総務庁 1985、三谷 1988、西岡 2000、田淵・中里 2004）で確認され、さらに途中同居が多いことから、日本の家族は修正直系家族である（那須 1962,1967,1972,1973）あるいは直系家族規範が持続している（清水 1996,1997、加藤 2005）または残存している（西岡 2000、白波瀬 2005）という議論が行われている。他方では女兒が選好され、「一卵性母娘」といわれるほど、母娘の間ではコミュニケーション行動、家事や育児の援助が多く行なわれ、母娘の絆が強い（西岡 1997、黒田 1998、白波瀬 2005）ことが明らかにされている。ここから、日本の家族は戦前の家規範から解放され、親子関係は双系的になり（三谷・盛山 1985、三谷 1991）、選択されるものによって変わってきたという議論もみられる（春日井 1997,2005）。

もし三谷（1985,1991）や春日井（1997,2005）が主張するように、夫側（息子側）と妻側（娘側）の間で親子関係がより対等になり、双系的になり、あるいは選択的になっているならば、娘との間で相互援助やコミュニケーション活動が活発に行なわれているにもかかわらず、なぜ長男との同居が相変わらず多いのだろうか。言い換えればなぜ娘との同居、そして息子との相互援助やコミュニケーション活動が選好されないのだろうか。

また、日本の家族は修正直系家族規範（那須 1962,1967,1972,1973）あるいは直系家族規範が持

続している（清水 1996,1997、加藤 2005）または残存している（西岡 2000、白波瀬 2005）ならば、母娘のきずなをいかに解釈したらよいか。直系家族制度と母娘の交際や援助とは矛盾しないものだろうか。長男との同居、娘との相互援助やコミュニケーション活動について、これら一見して矛盾するような現象を同時に説明できる理論や仮説が求められているといえよう。

このような問題意識のもと、本稿ではこれまで先行研究で明らかになった事実を最新の全国データで確認し、説明を試みたいと考える。具体的に既婚子とその両親との関係に注目し、親との居住関係、相互援助、さらに親子間のコミュニケーション活動は既婚子の性別、出生順位によっていかなる特徴をもつか、日本家族社会学会全国家族調査委員会が 2004 に行なった全国調査のデータを用い、分析を行なう。

## 2．世代間関係における非対称性に関する先行研究

長男かその他の子どもか、また息子が娘かによって、親子間の関係は対等（等量）ではなく、いずれかの側が強調されるか、あるいは偏る現象が存在する。日本の直系家族制度において、長男とその他の子どもとの間に大きな違いがあり、家業や家名、そして家産の相続は長男に多い。そして両親と同居し、両親の扶養や介護を行なうのも長男であることが多い。その他の子どもはいずれ親元を離れ分家するか、他家の養子となるか、あるいは嫁ぐことが運命付けられている。そのために、同居子と別居子との間に、そして家の構成員である息子と他家へ嫁いだ娘との間に、両親との接触や交渉には異なった傾向が存在するとされている（森岡ら 1968）。

### 2-1 同居子と別居子との間の非対称性

老親の居住形態に関しては、長男との同居が多いことがこれまでの研究で明らかになっている（総務庁 1985、三谷 1988、西岡 2000、田淵・中里 2004）。そして、長男と同居することにより、日本では同居子との濃密な接触が存在する一方、別居子との接触頻度が低く、その結果、全体として欧米に比較し既婚子との接触は相対的に低くなっている。つまり「同居子との濃密な接触・別居子との疎遠な交渉」を招いていると指摘されている（湯沢 1973、那須 1974）。

ところでなぜ長男との同居が他の非同居子との疎遠の交渉を招くかについては、親側のニーズに注目し、機能的な解釈が大橋・清水（1973）によって行なわれている。この解釈によれば、同居子がいるばあい、親の側における経済的、身体的、情緒的安定欲求は同居子によって充足されるので、非同居子との接触頻度は低くなるという。しかし、大橋・清水のこの機能的ニーズ説に対して、三谷（1991：45）が行なった調査では「既婚子との相互作用にはニーズ説を支持する範囲はきわめて限定されている。しかも、ニーズ説では説明できない相互作用が見出された」としている。例えば別居子との間の盆訪問、中元歳暮、不定期的贈与などをみると、同居子をもっている親のほうが同居子をもたない親より、多く行っている。これらはニーズ説で説明できない相互作用であり、「非同居子への配慮」であると三谷（1991）は解釈している。

また、老川（1976）は別居子と親との間の援助、接触という側面に注目し、別居子の場合、経済的援助の機能は弱い、表出的・情緒的な機能は果たしていることを明らかにした。つまり、別居子からの経済的な援助（送金）は少なく、またあってもその送金額が低いことから、経済的な扶助や負担は同居子に偏りやすいが、接触は保たれているというわけだ。

さらに、同別居によりサポートがいかに異なるかを研究するものとして野口（1991）、春日井

(1997)、西岡(2000)、直井(2001)、野辺(2003)があげられよう。野口(1991)が東京都板橋区で行なった調査では、高齢者が同居家族から受けるサポート(手段的には看病やまとまった借金、ちょっとした用事を頼む、情緒的には悩み事を聞く、元気づける、おもいやりなどのサポート)は別居の子ども・親戚から受けるサポートより概して多かったことを明らかにしている。春日井(1997)、西岡(2000)、直井(2001)、野辺(2003)も親との居住関係により、親子間の接触や援助が異なること、同居または近居が親子間の接触と援助を容易にしていることを明らかにしている。

このように、同居子と別居子の親子関係がいかに異なるかに関して、同居子をもつ親ともたない親では、別居子との交際・援助は異なるか、別居子とその親との交際・援助は疎遠であるか、同居子と別居子では親子間の交際・援助がいかに異なるかと、3つの方向性から検討されている。本稿では の立場を取り入れる。つまり居住関係(同居、近居、遠居)により、親子間の経済的、また非経済的な援助とコミュニケーション活動はいかに異なるかを検証する。

## 2-2 息子と娘との間の非対称性

同居子が別居子かでの違いとともに、子どもの性別により、親子関係の相互作用が大きく異なる。森岡ら(1968:264-265)は、「伝統的に家の世代的連続を重視してきたために、家の継承者たる男性とくに長男優位が見られる。そこでは、直系成員と傍系成員の区別のほか、両者を含む家成員と他家へ嫁いだものとの区別が都市の親族関係にも現れている」としている。森岡らの考えは他の社会学者にも共通して見出せる。たとえば、西岡(1997:37)は「日本の伝統的な直系家族制にあっては、夫側の親族との結びつきが強く、一般的に夫方中心の生活交誼が営まれる傾向があり、重要な支援資源は夫方中心の親族関係とみなされてきた」と述べており、同じく三谷(1991:46)は「伝統的日本の家族にあっては、家業及び家産を継承すべき特定子と同居し、他の男子との関係は本分家関係として構造化されるとともに、他方において、妻方親族あるいは娘の嫁ぎ先親族は他家に属するものとされて、妻方親族との交際はかなり限定されてきたと考えられる」としている。つまり長男とその他の子どもの区別とともに、息子と娘との区別が存在し、伝統的な直系家族制度においては親族関係が夫方親族への傾斜と妻方親族との疎遠の状況にあると捉えられている。

このような伝統的な家族・親族制度や規範は戦後民法の改正により、財産の均分相続が規定され、また親子間、男女間の平等が法律で保護されるようになったため変容が迫られており、昔のような長男とその他の子どもとの区別、さらに息子と娘との区別が徐々に減少しつつあると一般的に信じられている。現代の親子関係、特に夫(息子)方と妻(娘)方の非対称性を解明するために、三谷らは(1985,1991)は1982年から1986年にかけて札幌、仙台と福岡で一連の調査を行ってきた。これらの調査から三谷(1991)は対象者とその両親、さらに対象者とその結婚した息子夫婦、娘夫婦との接触に注目し、次のような結果を明らかにした。それは 妻方優位の項目が夫方優位の項目を上回っている。 接触内容からいえば、訪問行動、通信行動、贈答行動及びサービスにかかわる援助行動においてはすべて妻方(娘方)優位であるのに対し、夫方(息子方)優位の項目は経済的援助の領域に限られるということである。この分析では夫側よりはむしろ妻側の優位性、そして息子とは経済的援助、娘とは交際やその他の援助を行なうという機能分化が確認されている。その後の研究からも息子と娘の機能分化(白波瀬2005)、そして娘との緊密な交際や援助関係がしばしば報告されている(横山ら1994、古谷野ら1995、野辺2003)。

このように世代間関係は、息子と娘との間の非対称性がだんだん弱体化し、場合によっては娘に傾斜する傾向さえ確認されている。なぜ接触や援助は娘との間で多く行われるかについては、三谷

(1991:46)は「伝統的家制度の戦後における弱化は、長男重視と夫方 妻方差別を減少させ、親族交際をより平等的、双務的なものに変えてきつつあると考えられる」と議論している。また、春日井(1997,2005)は娘の出産・子育てというライフイベントが母娘の共有体験となり、母娘のきずなを強めると解釈するとともに、親子関係のあり方が規範的なものから、個々人の志向やこれまでの関係により選択されるものによって変わってきていると指摘している。

つまり直系制家族では親子関係が長男優位と夫方優位であったが、今日に見られるような娘との緊密な交際や援助関係はまさしく家族制度や規範の変化により生じた現象以外のなにものでもない。これまで多くの研究者が捉えてきた。確かにこの見方は戦後日本の小家族論的な家族変動論や親族変動論とはたいへん整合性のよいものである。なぜなら、家族変動論は家族が直系制家族から夫婦制家族への変動を唱え(森岡 1993)、親族変動論は家族の変動とともに同族の漸次的な解体傾向、家を単位とする「親族関係」から「双系的親族関係」への変容を唱えてきた(光吉 1983)。これらの家族変動論と親族変動論の理論的枠組みと、娘との緊密な交際や相互援助が行なわれているという実証研究の結果とは整合性のよいものであるからだ。さらに付け加えるならば、娘との緊密な交際や援助は 1950 - 60 年代のアメリカやイギリスを中心とする欧米での研究結果(Glick 1957、Young&Willmott 1957、Rogers&Leichter 1964、Sweetser1964、Shanas et al 1968)とも一致するものである。

しかし疑問はないわけではない。日本の親子関係は欧米と根本的に異なるのは、アメリカやイギリスなどの欧米諸国では老親が娘との同居が多い(Glick 1957、Young&Willmott 1957、Rogers&Leichter 1964、Sweetser1964、Shanas et al 1968)とされるが、日本では息子、主に長男との同居が一貫して優位である点である。もし日本の家族が本当に夫婦制家族になっているならば、なぜ戦後半世紀以上の歳月を経た今日でも長男との同居が最も多く、3 割以上<sup>(1)</sup>を占めているのか。また、親族変動論が主張するように親族関係が双系的になっているならば、なぜ居住や経済的援助が息子との間で行なわれ、交際や家事・育児などの援助が娘との間で行なわれるのか。さらにいうならば、戦後見られる母娘のきずなの強さや息子と娘の機能分化は本当に戦後のみの傾向であるか。

ともあれ、いっぺんにすべての疑問を解くことができないので、本稿ではまず最新の全国データを用い、同別居や相互援助と交際は子どもの性別や出生順位によりいかに異なるか。同居子と別居子の非対称性と、息子と娘の非対称性の現状を確かめることからスタートしよう。現状を明らかにしたうえで、筆者なりの仮説、解釈を提示してみたい。

### 3 . 調査概要と対象者属性

本稿で用いたデータは日本家族社会学会全国家族調査委員会が次の要領で行った調査によるものである。

対象：日本国内に居住する 1926 ~ 1975 年生まれの日本国民

標本抽出法：層化 2 段無作為抽出法

標本サイズ：10,000 人

調査法：訪問留置法

実査時期：2004 年 1 月 ~ 2 月

回収票数：6,302

有効回収率：63%

そして、本稿では調査時に配偶者(内縁を含む)がおり、そして回答者自身の父親または母親(配偶者の両親を除く)の少なくとも一人が生存している対象者に限定して分析を行なう。対象者の属性は表1のとおりである。

表1 対象者の属性

性別	男性 45.6(1434)	女性 54.4(1709)	合計 100(3143)					
年齢	-49年生まれ	50-59年生まれ	60-69年生まれ	70年生まれ-	合計	平均年齢		
男性	27.3(392)	30.6(439)	28.9(415)	13.1(188)	100(1434)	46.5歳		
女性	19.6(335)	30.0(512)	33.5(572)	17.0(290)	100(1709)	44.3歳		
学歴	中学校	高校	各種専門学校	短大・高専	大学	大学院	その他	合計
男性	8.2(117)	41.3(589)	8.8(125)	5.2(74)	33.6(480)	2.6(37)	0.4(5)	100(1427)
女性	6.0(102)	42.7(726)	15.3(261)	23.2(394)	12.2(208)	0.4(6)	0.2(4)	100(1701)
職業	経営者、役員	常時雇用	臨時雇い・パート・アルバイト	派遣社員	自営業主、自由業者	自営業の家族従業者	内職	合計
男性	6.9(99)	72.7(1041)	2.7(38)	0.7(10)	14.5(207)	2.4(35)	0.1(1)	100(1431)
女性	1.6(26)	43.9(704)	39.3(630)	2.2(35)	3.4(54)	7.7(124)	1.9(30)	100(1603)
年収	収入がない	~100万円未満	100-299万円	300-499万円	500-699万円	700-899万円	900万円-	合計
男性	0.7(10)	1.9(26)	13.6(187)	31.2(427)	25.6(351)	16.5(226)	10.4(143)	100(1370)
女性	33.3(548)	32.8(539)	22.0(362)	7.7(127)	2.2(36)	1.6(26)	0.4(7)	100(1645)

## 4. 分析結果

### 4-1 居住

図1に示されたように、父親や母親と同居しているのは男性対象者が多い。その中でも、父親よりは母親との同居率が高い。また、表2aと2bに示されているように若年コーホートのほうが親との同居率が低く、近居率が高いこと、そして息子と娘とを比較した場合、息子と親との同居率が一貫して高いことが確認できる。

さらに息子のなかでも実際親と同居しているのは長男が多いことが図2のとおりである(詳細なデータは表3a、3bを参照されたい)。親との居住に関して、長男の32.3%が父と同居し、38.9%が母と同居しているが、次三男では9.2%と13.4%である。また娘では長女でも次三女でも父や母との同居率はいずれも1割未満である。以上の分析から居住に関してはコーホートの差はあるものの、息子、特に長男と親との同居が多いことが確認された。

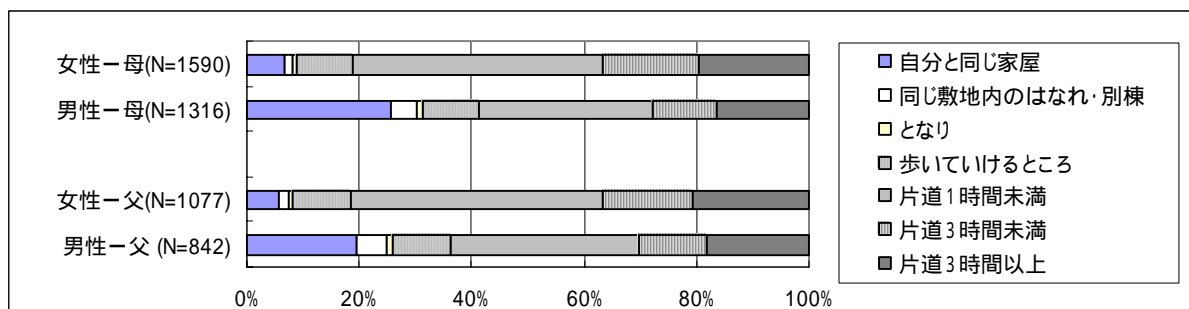


図1 既婚子からみた親との居住関係

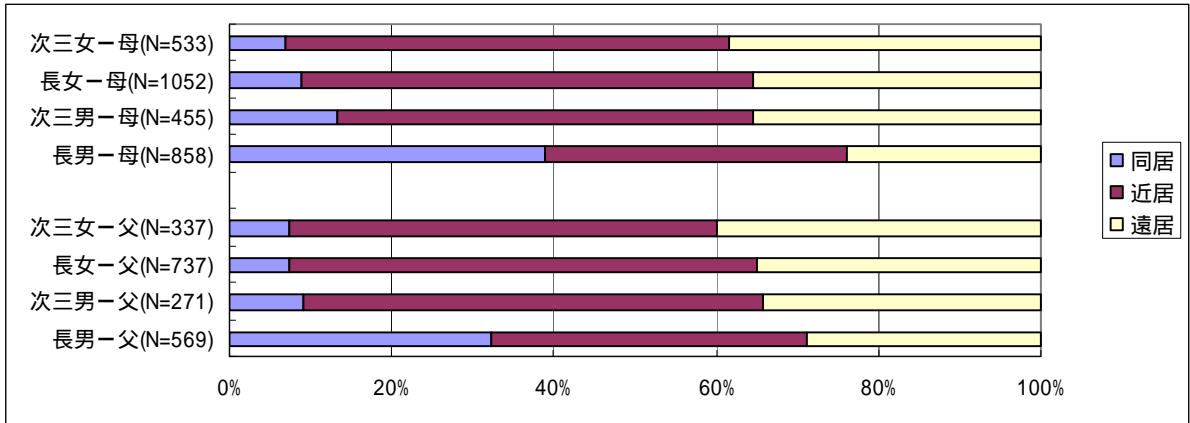


図2 性別・出生順位と親との居住関係

注:「自分と同じ屋敷」と「同じ屋敷内のはなれ・別棟」を「同居」、「となり」「歩いていけるところ」「片道1時間未満」を「近居」、それより遠いものを「遠居」とみなす。以下も同様。

#### 4-2 相互援助

まず、既婚子の出生コーホート別でみた援助関係は図 3a~3d (詳細なデータは表 2a、2b) のとおりである。若年コーホートほど親から経済的・非経済的な援助を多く受けるが、その反対に年長コーホートほど、親への援助を多く行っている。

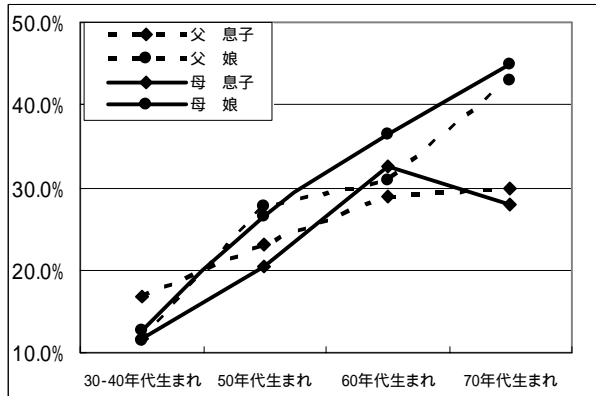


図 3a 性別とコーホート別の親から子への経済的援助

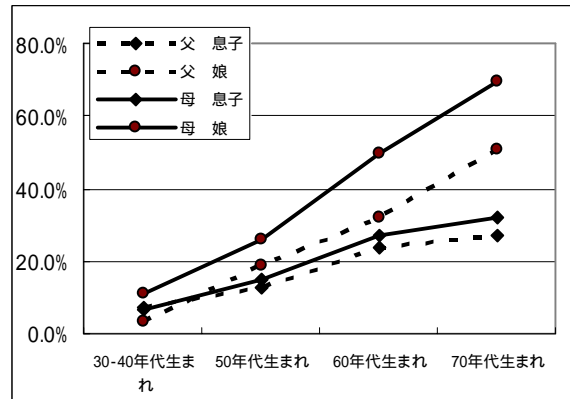


図 3b 性別とコーホート別の親から子への非経済的援助

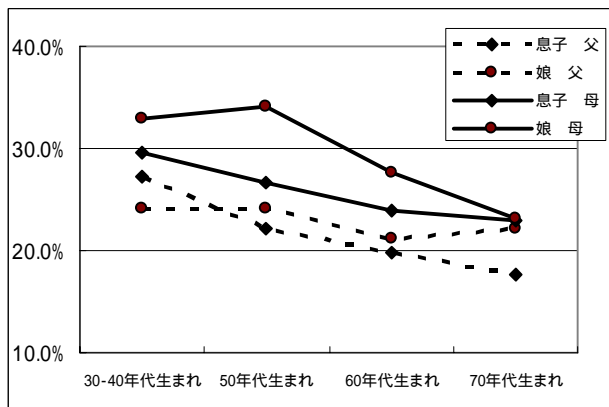


図 3c 性別とコーホート別の子から親への経済的援助

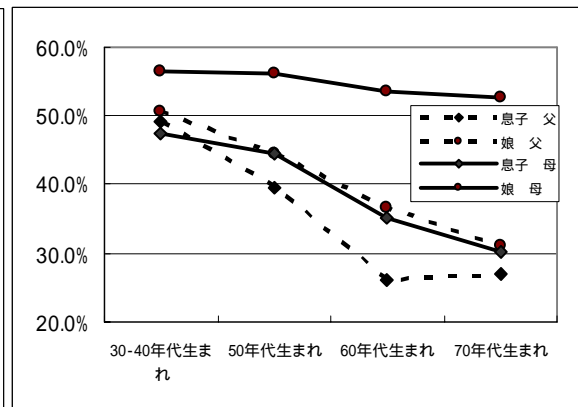


図 3d 性別とコーホート別の子から親への非経済的援助

つぎに、既婚子の性別でみた場合、どのコーホートも母から娘への経済的・非経済的援助が多く、そして、娘から親、特に母親への援助が多い。

さらに、既婚子の出生順位で見た場合、表 3a、3b に示されているように長男は次三男に比して、親から非経済的援助を多く受けており、また長男は母親に対して非経済的援助を多く行なっている。

最後に、親子の居住関係と相互援助との関連は、図 4a~4d のとおりである（詳細なデータは表 4a と 4b）。全体的に居住関係に影響を受けやすいのは非経済的な援助であり、遠居よりは近居、近居よりは同居のほうが親子間の非経済的援助を活発に行っている一方、経済的な援助は必ずしも居住距離には影響されないものである。しかし、子どもの性別に注目した場合、同じく同居（または近居、遠居）でも娘と親との間の経済的・非経済的援助が多い。場合によっては別居している娘との援助の授受は同居している息子とのものより多い傾向も確認される。たとえば、近居している娘への親からの経済的・非経済的援助は同居している息子へのものよりも多い傾向がある。

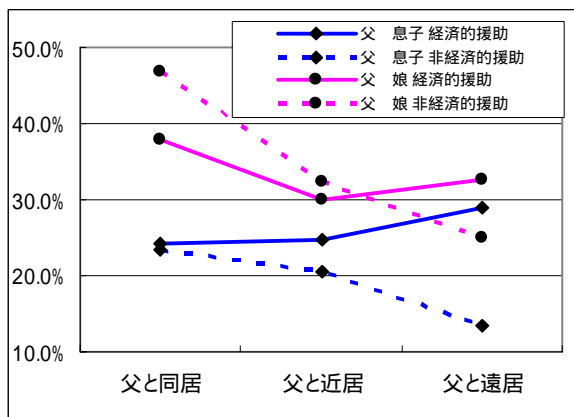


図 4a 父との居住関係と父からの経済的・非経済的援助

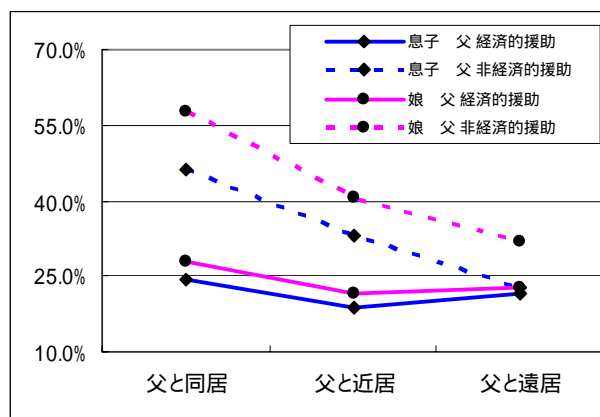


図 4b 父との居住関係と子からの経済的・非経済的援助

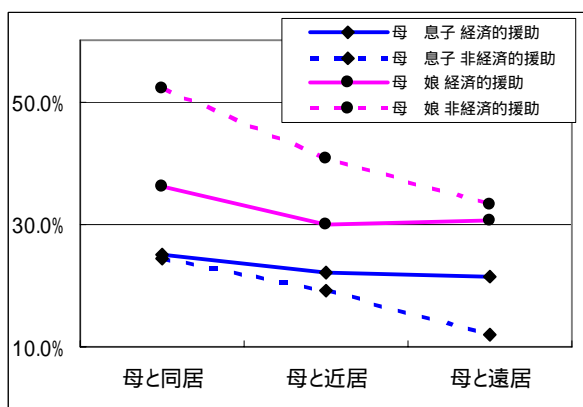


図 4c 母との居住関係と母からの経済的・非経済的援助

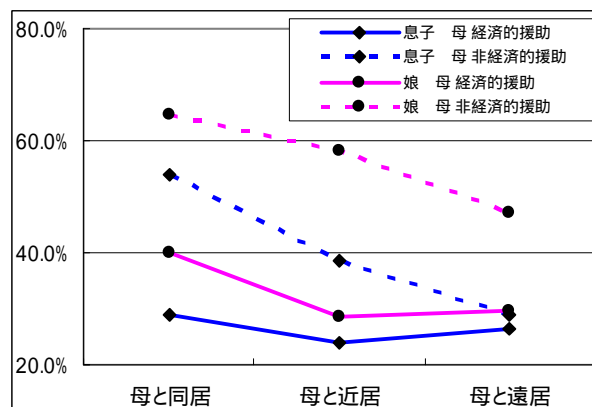


図 4d 母との居住関係と母からの経済的・非経済的援助

以上見てきたように、親たちは息子（主に長男）と同居するものが多い一方、援助の授受についてはむしろ娘との間に活発に行っている。特に母と娘との間に一貫して経済的にも非経済的にも相互に援助しあう傾向がある。

#### 4-3 コミュニケーション活動

コミュニケーション活動についてもほぼ同様な傾向が見られる。表 3a、3b と表 4a、4b に示されているように、長男は次三男より親との会話が長く、そして遠居よりは近居、近居よりは同居のほうが親子間のコミュニケーションを活発にしている。しかし、子どもの性別に注目した場合、同じく同居（または近居、遠居）している子どもでは娘と親とのコミュニケーションのほうが多いことが確認できる。親子間のコミュニケーションも居住関係に制約されるとともに、子どもの性別によっても影響を受けている。同じ居住関係ならば、娘とのコミュニケーションのほうが活発である。

これまでの分析の結果を要約すると、長男との同居が多い。そして、次三男に比して長男との間の非経済的援助やコミュニケーション活動が多く行なわれる。別居子に比して同居子との間では、非経済的援助の授受とコミュニケーションが活発に行なわれていることが確認できた。このような非経済的援助の授受やコミュニケーションは一緒に（または近くで）生活していることに即して発生するものと考えられよう。しかし、同居していない娘との相互援助やコミュニケーションが多い。特に母と娘との間に相互援助が最も多い。これは、居住関係では説明できないものである。

#### 4-4 同居や相互援助の規定要因に関する多変量分析

既婚子とそれぞれの親との同居、親子間の経済的または非経済的援助は社会経済的要因や居住地域の要因などの影響を取り除いても、出生順位や性別により異なるかを明らかにするために、それぞれロジスティック回帰分析を行なった。

被説明変数はそれぞれの親との同居、親からの経済的援助、非経済的援助と子からの経済的援助、非経済的援助である。

説明変数は親側の要因として、各親の配偶者の生死、各親の学歴と各親の職業の有無、きょうだい関係の変数としてきょうだい数、出生順位（長男か否か、長女か否か）、対象者本人の変数として出生コーホート、世帯収入、居住に関する変数として都市規模の変数と居住地域（東日本か西日本か<sup>(2)</sup>）を用いる。なお、援助関係に関する分析では、親との居住関係も説明変数として加えられる。

分析結果は表 5a～5d である。

まず、息子と父・母との同居についてロジスティック回帰分析を行なったところ、有意確率が 0.05 以下の変数は出生順位、出生コーホート、親の職業の有無と都市規模である。長男であること、出生コーホートが年長の者ほど、親が職業をもつ者ほど、そして都市規模が小さいところほど、同居率が高い。そして娘と親との同居については、きょうだい数、出生コーホートが有意である。きょうだい数が少ない者、出生コーホートが年長の者ほど、同居率が高い。父との同居に関しては、都市規模も若干影響力をもち、町村や人口規模の小さい地域のほうが同居率が高い。

つぎに、親子間の援助については、親からの援助に有意であるのは居住関係、出生コーホートである。同居または近居している場合、出生コーホートが若年の者ほど、親からの援助が多い（父から息子への経済的援助だけは居住関係にも出生コーホートにも規定されない）。一方、親への援助に対して有意であるのは、居住関係と片親の生死である。同居または近居している場合、片親が死亡している場合、親への援助が多い。このような傾向は特に母親との間に見られる。

それ以外に、息子と母、娘と母との間の同居や援助に対して、経済的要因も有意なものである。まず、息子と母の間では息子の世帯収入の高いほうが、母との同居、母への経済的援助が多い。反対に息子の世帯収入が少ないところでは、母と息子との間で非経済的な援助の授受が多く行なわ



れている。そして、娘と母との間では娘の世帯収入が多いところでは母への経済的援助が多く、その反対に母からの経済的援助が少ない。

以上の分析結果から同居は長男との者が多く、そして親子間の相互援助は居住関係により大きく規定され、さらに親が若いときに子どもに援助を与えるが、親が老い、片親をなくしたときに子どもが親に対して援助を与えるという互酬性、そして親子間の援助関係は子どもの経済的な状況により異なる傾向が見出せる。

## 5 . 結論と考察

### 5-1 結論 先行研究との照合

まず、同居子と別居子との間の非対称性に関する「同居子との濃密な接触・別居子との疎遠な交渉」という湯沢・那須仮説は必ずしも当てはまらないといえよう。確かに今日でも長男との同居が多く、そして男子兄弟間、または女子姉妹間では、遠居よりは近居、近居よりは同居のほうが親子間の援助やコミュニケーション活動が多い。しかし、子どもの性別に注目した場合、同居の息子よりはむしろ別居の娘との相互援助やコミュニケーション活動が多いことが明らかになった。

そして息子と娘の非対称性については、居住は息子、特に長男との同居が多い。しかし、相互援助やコミュニケーション活動は娘との間で活発に行なわれている。特に母娘の相互援助やコミュニケーション活動が突出して活発である。これらの結果は横山ら（1994）、古谷野ら（1995）、野辺（2003）の研究結果とは一致するものである。

### 5-2 考察

既婚子と親との居住や援助およびコミュニケーション活動に注目した場合、長男との同居が多い一方、娘との援助とコミュニケーション活動が活発に行なわれていることが明らかになった。しかし、以上の現象をいかに理解したらよいだろうか。

まず、長男との同居が多いことは、財産の相続と扶養は主に長男との間に行われることを意味し、日本の家族は今日でも一子相続の原理が生き続けている。つまり、清水（1996,1997）や加藤（2005）が主張するように直系家族制度が持続していると考えられよう。

つぎに娘との活発な交際や援助は、一見して新しい現象とみなされやすいが、実は昔から一貫して行われてきた可能性、つまり伝統の引き継ぎである可能性が大きいという指摘もある（山中 1981）。娘との緊密な交際や援助を新しい現象とみなしたのは、「伝統的な直系家族制度においては親族関係が夫方親族への傾斜と妻方親族との疎遠の状況にある」という前提が存在し、昔は妻方親族との交際が疎遠であったと捉えられているからだ（森岡ら 1968、西岡 1997、三谷 1991）。そのため、娘との交際や援助が活発であることは、新しい現象とみなされる。しかし、この前提ははたして正しいだろうか。

たとえば、親族の認知範囲に関しては、夫方と妻方、あるいは血族と姻族との間に大差がなかったことが正岡（1977）と藤見（1983）の研究で明らかにされている。正岡（1977）は東京世田谷区の中流階層の親族関係の認知と接触に注目した調査を行い、「親しくする親類」「頼りにする親類」に挙げられる親族の範囲は、血縁者とほとんど同じ範囲の配偶者の血縁者を含んでいることを明らかにしている。そして藤見（1983：189）が1970年の山梨県の比志で行なった調査においても「親類の範囲内には、血族と姻族とがほとんど同じ程度で内包されている」。そして、このような「認知

親族の範囲は、死者を除くならば、相互作用を行なう親族の範囲とほぼ一致している」としている。

そして結婚した娘と親の関係に関する一連の研究では、女性は結婚後も生家との深いつながりを持ち、生家における労働、生家における衣類の調達、節礼、婚礼儀礼としての里帰り、生家における出産など、生家に依存する慣行が報告されている（瀬川 1957、大間知 1958、土田 1964、中込 1987、植野・蓼沼 2000）。

さらに明治時代から 1970 年代までの娘と実家との付き合いの変容をもっとも鮮明に捉えている研究として、増田（1973）があげられよう。増田（1973：18）は嫁と姑を結婚時期により 1901 - 1930 年、1931 - 1945 年、1946 - 1960 年、1961 - 1970 年の 4 つのコーホートに分け、嫁と姑という新・旧両世代の実家との付き合いについての比較を行なっている。「親子の情緒に支えられたプレゼント（たとえばひな人形）の慣行は依然根強いものがあり、盆・暮の贈答のような親族間の儀礼もそれほど衰えていないのに対して、本来嫁自身が婚家で正当な権利をもつべき事柄に対するアフター・サービス、たとえば小遣いの支給や医療費の負担などの慣行は急速に影をひそめてきた」と述べている。つまり、嫁いだ娘が実家の親にしてもらったことの割合は、（新・旧世代間に）ほとんど変化が見られず、明治時代から娘と実家との間に情緒的・儀礼的な付き合いをしていることが実証され、また生家からの経済的な援助は昔のほうがもっと頻繁に見られたともいえるデータまで提示されている。

このように親族の認知範囲や、娘と実家の付き合いについての慣行の存在、また明治時代から 1970 年代までの娘と実家の付き合いの比較にしても、以上の先行研究で明らかになったことは、伝統的な直系家族制度において親族交際が夫側親族への傾斜と妻方親族との疎遠状態にあるというわれわれの常識とは異なるものである。となると、娘との緊密な援助や交際を新しい現象とみなすのは、歴史的な事実と異なる可能性があるように思われる。

それでは親子関係は戦前と戦後ではどんな異同があるのだろうか。結論を先に言うと、親子関係にみる息子と娘の機能分化という構造が変化しないものの、親族集団の縮小や親世代の経済力の上昇により、親子間の交際や相互援助は量的に増加しているという点であろう。

これまでの研究では日本の親族組織は同族組織と親類関係に分類でき、前者は系譜の継承や家の存続を目的とし、相互扶助的機能を果たし、フォーマルで優位な関係であるが、後者はインフォーマルな個人的接触と相互援助を目的とし、相互援助や相互接触による情緒的安定及び連帯の機能を果たす。また前者に比してインフォーマルで劣位にあるとされている（光吉 1966,1974,1983、藤見 1983）。もし息子を同族とみなし、娘を親類とみなすと、息子との関係はフォーマルな関係であり、親との同居や財産の相続、そして親の扶養や介護などを通して親子の間で相互扶助的な機能を果たす。一方、娘との関係はインフォーマルな関係で、交際や家事・育児または介護の援助を通して、相互援助や交際による情緒的安定及び連帯の機能を果たすことになる。つまり、息子と娘の機能分化は親族研究の知見に適合し、戦前から一貫して行なわれてきたと考えることができよう。

一方、同族や親類は戦前までもっと機能が多く、規模も大きいものであったが、戦後産業構造の変化に伴い同族の機能や規模が縮小した。また人口学的にも子ども数の減少によりきょうだい関係、さらにおじやおばとの関係が少なくなったために、これまで分散していた親族関係が親子関係により集約する。それとともに現在の親世代の経済力の影響も合せて、相対的には親子間の相互援助や交際が活発になったのであろう。

しかし、このような変化はあくまでも親族規模の縮小にとまなう量的な変化であり、息子との関係は今日でも同居や財産の相続、老親の扶養や介護などの相互扶助の機能を果たし、娘との関係は

交際や相互援助の機能を果たしていることから、親子関係の構造はむしろ変化していないと見るべきであろう。

日本の親子関係は双系的になったかという問いに対し、本稿の答えは否である。むしろ親子関係はそもそも構造的に変化していないというのは本稿の結論である。ただし息子との相互扶助、娘との相互援助関係は双系的とみなすか、それとも制度的単系とみなすかは、何をもって双系的とみなすかの議論も含め、更なる議論を必要とする。

そして本稿では日本の家族・親族制度や構造を単一なものとして扱ってきたが、すでにこれまで有賀（1946）光吉（1966）喜多野（1975）蒲生（1978）清水（1996,1997）らが明らかにしているように、家族・親族制度や構造には地域や階層より異なるという多様性を内包している。今後、これらの点を考慮したうえで親子関係を含む親族関係を研究していく必要があると考える。

## 注

（1）長男との同居率は本稿の表 3a、3b を参照されたい。長男と父との同居率は 32.3% であり、母との同居率は 38.9% である。

（2）福井、岐阜、愛知より東の地域を東日本と、京都、滋賀、三重より西の地域を西日本とみなす。ただし、北海道は東日本から除外した。

## 参考文献

有賀喜左衛門 1946 「都市社会学の課題」(『有賀喜左衛門著作集』 巻 1969 年に再録)

藤見純子 1983 「家行事遂行における同族と親類」喜多野清一編『家族・親族・村落』早稲田大学出版部 pp.183-208

古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・児玉好信 1995 「老親子関係に影響する子ども側の要因」『老年社会科学』第 16 巻第 2 号 pp.136-145

蒲生正男 1978 『増訂・日本人の生活構造序説』ペリかん社

Glick, Paul C., 1957, *American Families*, New York : Wiley.

春日井典子 1997 『ライフコースと親子関係』行路社

春日井典子 2005 『介護ライフスタイルの社会学』世界思想社

加藤彰彦 2005 「「直系家族制から夫婦家族制へ」は本当か」熊谷苑子・大久保孝治編『コーホート比較による戦後日本の家族変動の研究』日本家族社会学会全国家族調査(NFRJ)委員会 pp.139-154

喜多野清一・正岡寛司編著 1975 『「家」と親族組織』早稲田大学社会科学研究所

黒田俊夫 1998 「世代間扶養・援助関係構造の転換」毎日新聞社人口問題調査会編『「家族」の未来：“ジェンダー”を超えて』毎日新聞社人口問題調査会 pp.9-40

正岡寛司 1977 「親族体系と親族接触」山根常男・森岡清美・本間康平・竹内郁郎・高橋勇悦・天野郁夫編『テキストブック社会学(2)家族』有斐閣

増田光吉 1973 「嫁・しゅうとめ関係の変化 都市近郊農村の調査報告」『甲南大学紀要文学編』(9) pp.1-19

三谷鉄夫・盛山和夫 1985 「都市家族の世代間関係における非対称性の問題」『社会学評論』143 第 36 巻第 3 号 pp.51-65

- 三谷鉄夫 1988 『現代都市家族論』都市家族研究会
- 三谷鉄夫 1991 「都市における親子同・別居と親族関係の日本の特質」『家族社会学研究』第3号 pp.41-49
- 光吉利之 1966 「同族組織と親類関係」『社会学評論』65 第17 卷第1号 pp.53-69
- 光吉利之 1974 「日本の親族・同族」青山道夫他編『講座家族6 - 家族・親族・同族』弘文堂 pp.231-249
- 光吉利之 1983 「現代日本の親族変動 一つの試論」喜多野清一編『家族・親族・村落』早稲田大学出版部
- 森岡清美・本間淳・山口田鶴子・高尾敦子 1968 「東京近郊団地家族の生活史と社会参加」『社会科学ジャーナル』No.7 pp.199-278
- 森岡清美 1993 『現代家族変動論』ミネルヴァ書房
- 中込睦子 1987 「日本の族制研究における婚姻概念 学史的整理の試み」『ふいりど』第4号 pp.33-42
- 直井道子 2001 『幸福に老いるために - 家族と福祉のサポート』勁草書房
- 那須宗一 1962 『老人世代論』芦書房
- 那須宗一 1967 「老人と家族」森岡清美編『家族社会学』有斐閣 pp.102-117
- 那須宗一 1972 「現代社会と老人の家族変動」那須宗一・増田光吉編『老人と家族の社会学』垣内出版 pp.1-42
- 那須宗一 1973 「老人扶養研究の現代的意義」那須宗一・湯沢雅彦編『老人扶養の研究 老人家族の社会学』垣内出版 pp.3-17
- 那須宗一 1974 「老人問題」青山道夫他編『講座 家族 7 家族問題と社会保障』弘文堂
- 西岡八郎 1997 「家族機能の変化」阿藤誠・兼清弘之編『人口変動と家族』大明堂 pp.25-45
- 西岡八郎 2000 「日本における成人子と親との関係 成人子と老親の居住関係を中心に」『人口問題研究』56-3pp.34-55
- 野辺政雄 2003 「地方小都市の高齢女性と別居子の関係」社会学研究会『ソシオロジ』第47 卷3号 pp.55-69
- 野口祐二 1991 「高齢者のソーシャル・サポート：その概念と測定」『社会老年学』31号 pp.38-48
- 大橋馨・清水新二 1973 「親族接触に関する国際比較論の問題点とその再検討」『明治学院論叢』206 pp.1-40
- 老川寛 1976 「他出別居子との関係」上子武次・増田光吉編著『三世代家族』垣内出版
- 大間知篤三 1958 「婚姻」大間知篤三ほか編『日本民俗学大系』3 平凡社 pp.175-202
- Rogers, Candace L. & Leichter, Hope J. 1964 "Laterality and Conflict in Kinship Ties", Goode, W.J. ed., Readings on the Family and Society. Prentice Hall. pp.213-218
- 瀬川清子 1957 「嫁の里帰り」『婚姻覚書』講談社 pp.130-178
- Shanas, Ethel et al., 1968, Old people in Three Industrial Societies. London : Routledge & K. Paul.
- 清水浩昭 1996 「家族構造の地域性」ヨーゼフ・クライナー編『地域性からみた日本 多元的理解のために』 pp.65-91
- 清水浩昭 1997 「第2章 世帯統計からみた家族構造 日本の全体状況と地域性」熊谷文枝編著『日本の家族と地域性〔上〕 東日本の家族を中心として』 pp.57-72
- 白波瀬佐和子 2005 『少子高齢社会のみえない格差 ジェンダー・世代・階層のゆくえ』東京大学出版会

総務庁 1985 『家庭生活における老人の地位と役割に関する調査』

Sweetser,Dorian A.,1964 “Mother-Daughter Ties between Generations in Industrial Societies”,  
Family Process 3, pp.332-343

田淵六郎・中里英樹 2004 「老親と成人子との居住関係 同居・隣居・近居・遠居をめぐって」渡辺  
秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編 『現代家族の構造と変容』東京大学出版会 pp.121-147

土田英雄 1964 「嫁の定期的里帰り慣行に関する一考察」『大阪学芸大学紀要 A.人文科学』13  
pp.180-189

植野弘子・蓼沼康子編 2000 『日本の家族における親と娘 日本海沿岸地域における調査研究』風響  
社

山中美由紀 1981 「親族関係」上子武次・増田光吉編 『日本人の家族関係』有斐閣選書 pp.220-243

横山博子・岡村清子・松田智子・安藤孝敏・古谷野亘 1994 「老親と別居子の関係 団地に居住する  
女性老人の場合」『老年社会科学』第15巻第2号 pp.119-123

Young,Michael & Willmott,Peter 1957 Family and Kinship in East London. London : Routledge  
& Kegan Paul.

湯沢雍彦 1973 『図説 家族問題』日本放送出版協会

表2a 性別・出生コーホートと父子間の相互援助

	父との同居父との近居父との遠居		父からの		父への		父との会話		月に1-2回		年に数回まったくなかった	
	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	週に3-4回	週に1-2回	月に1-2回	月に1-2回	年に数回まったくなかった	年に数回まったくなかった
男性 30-40年代生まれ	50.9(58)	28.9(33)	20.2(23)	7.1(8)	27.2(31)	49.1(56)	10.5(12)	10.5(12)	16.7(19)	21.1(24)	10.5(12)	10.5(12)
50年代生まれ	32.8(75)	37.1(85)	30.1(69)	12.6(29)	22.2(51)	39.7(91)	9.5(22)	19.0(44)	21.2(49)	30.3(70)	4.3(10)	4.3(10)
60年代生まれ	18.2(60)	46.8(154)	35.0(115)	23.5(77)	19.8(65)	26.0(85)	5.5(18)	13.0(43)	31.5(104)	33.3(110)	4.2(14)	4.2(14)
70年代生まれ	10.0(17)	61.2(104)	28.8(49)	27.1(46)	17.6(30)	27.1(46)	4.1(7)	17.6(30)	41.8(71)	22.4(38)	3.5(6)	3.5(6)
合計	24.9(210)	44.7(376)	30.4(256)	19.0(160)	21.0(177)	33.1(278)	7.0(59)	15.3(129)	28.8(243)	28.6(242)	5.0(42)	5.0(42)
F値	83.7***			28.0***	4.3	28.0***	71.6***					
女性 30-40年代生まれ	12.6(11)	54.0(47)	33.3(29)	3.4(3)	24.1(21)	50.6(44)	10.3(9)	16.1(14)	31.0(27)	25.3(22)	2.3(2)	2.3(2)
50年代生まれ	6.5(18)	55.2(154)	38.4(107)	18.9(53)	24.2(68)	44.6(125)	10.3(29)	17.0(48)	31.6(89)	31.9(90)	3.5(10)	3.5(10)
60年代生まれ	8.5(38)	52.6(236)	39.0(175)	31.8(143)	21.1(95)	36.6(164)	7.1(32)	19.2(86)	31.0(139)	29.2(131)	4.2(19)	4.2(19)
70年代生まれ	4.6(12)	64.1(168)	31.3(82)	50.6(133)	22.1(58)	31.2(82)	8.8(23)	26.3(69)	32.8(86)	17.9(47)	3.1(8)	3.1(8)
合計	7.3(79)	56.2(605)	36.5(393)	30.7(332)	22.4(242)	38.5(415)	8.6(93)	20.1(217)	31.6(341)	26.9(290)	3.6(39)	3.6(39)
F値	14.4*			97.9***	1.1	16.5***	30.3*					

注: 「自分と同じ屋敷」と同じ屋敷内のはなれ・別棟を「同居」、「となり」歩いていけるところ、「片道」時間未滿を「近居」、それより遠いものを「遠居」とみなす。

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表2b 性別・出生コーホートと母子間の相互援助

	母との同居母との近居母との遠居		母からの		母への		母との会話		月に1-2回		年に数回まったくなかった	
	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	週に3-4回	週に1-2回	月に1-2回	月に1-2回	年に数回まったくなかった	年に数回まったくなかった
男性 30-40年代生まれ	45.0(158)	30.2(106)	24.8(87)	6.5(23)	29.6(104)	47.3(168)	9.9(35)	14.2(50)	17.6(62)	23.6(83)	7.1(25)	7.1(25)
50年代生まれ	34.4(135)	38.7(152)	27.0(106)	14.9(59)	26.6(105)	44.4(175)	10.2(40)	17.8(70)	21.8(86)	27.9(110)	3.8(15)	3.8(15)
60年代生まれ	21.6(84)	47.0(183)	31.4(122)	27.0(105)	24.0(93)	35.3(137)	7.7(30)	16.4(64)	32.3(126)	29.2(114)	1.0(4)	1.0(4)
70年代生まれ	10.9(20)	61.7(113)	27.3(50)	32.2(59)	23.0(42)	30.1(55)	6.6(12)	20.2(37)	39.3(72)	18.6(34)	3.3(6)	3.3(6)
合計	30.2(397)	42.1(554)	27.7(365)	18.6(246)	26.1(344)	40.5(535)	8.9(117)	16.8(221)	26.2(346)	25.9(341)	3.8(50)	3.8(50)
F値	94.8***			78.5***	4.2	22.0***	86.6***					
女性 30-40年代生まれ	11.6(36)	51.6(160)	36.8(114)	11.2(35)	33.0(103)	56.4(176)	8.3(26)	18.2(57)	31.5(99)	21.7(68)	2.9(9)	2.9(9)
50年代生まれ	7.9(36)	54.6(248)	37.4(170)	26.2(119)	34.1(155)	56.2(255)	8.3(38)	23.2(106)	34.4(157)	20.2(92)	1.3(6)	1.3(6)
60年代生まれ	7.9(43)	53.5(291)	38.6(210)	49.5(270)	27.7(151)	53.7(292)	12.2(66)	25.8(140)	30.0(163)	16.2(88)	1.5(8)	1.5(8)
70年代生まれ	5.3(15)	63.8(180)	30.9(87)	69.5(196)	23.2(65)	52.8(149)	16.7(47)	34.4(97)	21.3(60)	8.2(23)	0.7(2)	0.7(2)
合計	8.2(130)	55.3(879)	36.5(581)	38.9(620)	29.8(474)	54.8(872)	11.1(177)	25.1(400)	30.0(479)	17.0(271)	1.6(25)	1.6(25)
F値	15.4*			269.4***	12.6***	1.4	71.4***					

注: 「自分と同じ屋敷」と同じ屋敷内のはなれ・別棟を「同居」、「となり」歩いていけるところ、「片道」時間未滿を「近居」、それより遠いものを「遠居」とみなす。

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表3a 性別・出生順位と父子間の相互援助

	父との同居		父との近居		父との遠居		父からの		父からの		父への		父との会話		年に数回		まったくなかった	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~2回	年に数回	まったくなかった
長男	32.3(184)	39.0(222)	28.6(163)	27.1(155)	21.2(121)	19.4(111)	33.5(191)	18.9(108)	7.0(40)	16.4(94)	26.9(154)	26.2(150)	4.5(26)					
次三男	9.2(25)	56.5(153)	34.3(93)	22.6(61)	13.9(37)	24.3(65)	32.2(86)	7.7(21)	7.0(19)	12.5(34)	32.8(89)	33.9(92)	5.9(16)					
合計	24.9(209)	44.6(375)	30.5(256)	25.7(216)	18.8(158)	21.0(176)	33.1(277)	15.3(129)	7.0(59)	15.2(128)	28.8(243)	28.7(242)	5.0(42)					
F値	53.9***		2.0		6.3*	2.6	0.1	23.5***		3.7								
長女	7.3(54)	57.8(426)	34.9(257)	30.4(225)	31.8(234)	22.4(165)	38.5(284)	10.1(75)	8.7(64)	20.6(152)	31.4(232)	25.6(189)	3.7(27)					
次三女	7.4(25)	52.8(178)	39.8(134)	33.7(115)	28.4(97)	22.6(77)	38.5(130)	74(.25)	8.3(28)	18.9(64)	32.2(109)	29.6(100)	3.6(12)					
合計	7.4(79)	56.2(604)	36.4(391)	31.5(340)	30.7(331)	22.4(242)	38.5(414)	9.3(100)	8.5(92)	20.1(216)	31.7(341)	26.8(289)	3.6(39)					
F値	2.5		1.2		1.2	0	0	3.7										

注: 「自分と同じ屋敷」と「同じ屋敷内のはなれ・別棟」を「同居」、「となり」歩いていけると、「片道1時間未満」を「近居」、それより遠いものを「遠居」とみなす。

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表3b 性別・出生順位と母子間の相互援助

	母との同居		母との近居		母との遠居		母からの		母からの		母への		母との会話		年に数回		まったくなかった	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~2回	年に数回	まったくなかった
長男	38.9(334)	37.3(320)	23.8(204)	24.7(212)	21.1(182)	25.5(219)	43.2(372)	23.3(200)	10.1(87)	17.9(154)	24.3(209)	20.8(179)	3.6(31)					
次三男	13.4(61)	51.2(233)	35.4(161)	18.6(85)	13.6(62)	27.3(124)	35.6(162)	9.2(42)	6.6(30)	14.5(66)	30.0(137)	35.5(162)	4.2(19)					
合計	30.1(395)	42.1(553)	27.8(365)	22.6(297)	18.5(244)	26.1(343)	40.5(534)	18.4(242)	8.9(117)	16.7(220)	26.3(346)	25.9(341)	3.8(50)					
F値	92.5***		6.2*		11.1***	0.5	7.0**	67.1***		10.9								
長女	8.8(93)	55.7(586)	35.5(373)	31.6(334)	41.3(436)	29.9(315)	55.1(580)	16.7(177)	11.3(119)	25.6(271)	29.6(313)	15.2(161)	1.5(16)					
次三女	6.9(37)	54.6(291)	38.5(205)	28.5(153)	34.2(183)	29.8(159)	54.5(291)	12.4(66)	10.5(56)	24.0(128)	31.0(165)	20.5(109)	1.7(9)					
合計	8.2(130)	55.3(877)	36.5(578)	30.6(487)	38.9(619)	29.9(474)	54.9(871)	15.3(243)	11.0(175)	25.1(399)	30.1(478)	17.0(270)	1.6(25)					
F値	2.5		1.6		7.6**	0	0	10.9										

注: 「自分と同じ屋敷」と「同じ屋敷内のはなれ・別棟」を「同居」、「となり」歩いていけると、「片道1時間未満」を「近居」、それより遠いものを「遠居」とみなす。

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表4a 性別・居住関係と父子間の相互援助

	父からの		父への		父との会話					
	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~2回	年に数回	まったくなかった
男性										
父との同居	24.3( 51)	23.4( 49)	24.4( 51)	46.2( 96)	48.1(101)	16.7(35)	18.1( 38)	9.0( 19)	5.2( 11)	2.9( 6)
父との近居	24.8( 93)	20.6( 77)	18.9( 71)	32.9(123)	7.2( 27)	5.6(21)	21.3( 80)	39.4(148)	22.9( 86)	3.7(14)
父との遠居	28.9( 74)	13.3( 34)	21.6( 55)	22.7( 58)	0.4( 1)	0.4( 1)	4.3( 11)	29.7( 76)	56.6(145)	8.6(22)
合計	25.9(218)	19.1(160)	21.1(177)	33.1(277)	15.3(129)	6.8(57)	15.3(129)	28.9(243)	28.7(242)	5.0(42)
F値	1.7	8.6*	2.5	28.4***			444.3***			
女性										
父との同居	38.0( 30)	46.8( 37)	27.8( 22)	57.7( 45)	62.0( 49)	17.7(14)	7.6( 6)	5.1( 4)	6.3( 5)	1.3( 1)
父との近居	29.9(181)	32.5(196)	21.5(130)	40.5(244)	7.3( 44)	11.9(72)	28.0(169)	33.4(202)	16.7(101)	2.6(16)
父との遠居	32.6(128)	25.0( 98)	22.7( 89)	31.7(124)	1.5( 6)	1.5( 6)	10.7( 42)	34.4(135)	46.3(182)	5.6(22)
合計	31.5(339)	30.8(331)	22.4(241)	38.5(413)	9.2( 99)	8.6(92)	20.2(217)	31.7(341)	26.8(288)	3.6(39)
F値	2.4	16.5***	1.6	20.7***			465.0***			

注: 「自分と同じ屋敷」と同じ屋敷内のはなれ・別棟を「同居」、「となり」歩いていけるところ「片道1時間未満」を「近居」、それより遠いものを「遠居」とみなす。

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表4b 性別・居住関係と母子間の相互援助

	母からの		母への		母との会話					
	経済的援助	非経済的援助	経済的援助	非経済的援助	ほぼ毎日	週に3~4回	週に1~2回	月に1~2回	年に数回	まったくなかった
男性										
母との同居	24.9( 98)	24.4( 97)	28.9(114)	53.8(213)	53.3(210)	18.0( 71)	17.0(67)	5.3(21)	4.3(17)	2.0( 8)
母との近居	22.0(122)	19.1(106)	24.1(133)	38.7(214)	5.8( 32)	7.6( 42)	23.3(129)	38.3(212)	22.2(123)	2.9(16)
母との遠居	21.4( 78)	11.8( 43)	26.4( 96)	28.8(105)	0.5( 2)	0.5( 2)	6.3(23)	30.7(112)	55.1(201)	6.8(25)
合計	22.7(298)	18.7(246)	26.2(343)	40.5(532)	18.6(244)	8.8(115)	16.7(219)	26.3(345)	26.0(341)	3.7(49)
F値	1.5	20.0***	2.9	50.3***			779.6***			
女性										
母との同居	36.2( 47)	52.3( 68)	40.0( 52)	64.6( 84)	80.0(104)	10.0( 13)	4.6( 6)	4.6( 6)	0.8( 1)	0
母との近居	29.8(262)	40.7(357)	28.5(250)	58.2(509)	13.1(115)	15.4(135)	32.0(281)	28.9(254)	9.1( 80)	1.5(13)
母との遠居	30.5(177)	33.3(193)	29.5(170)	47.3(274)	3.3( 19)	5.0( 29)	19.3(112)	37.6(218)	32.8(190)	2.1(12)
合計	30.6(486)	38.9(618)	29.8(472)	54.7(867)	15.0(238)	11.1(177)	25.1(399)	30.1(478)	17.1(271)	1.6(25)
F値	5.2	18.5***	7.2*	22.1***			680.5***			

注: 「自分と同じ屋敷」と同じ屋敷内のはなれ・別棟を「同居」、「となり」歩いていけるところ「片道1時間未満」を「近居」、それより遠いものを「遠居」とみなす。

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001



表5a 息子と父親との相互作用に関するロジスティック回帰分析

	父との同居		父からの経済的援助		父への経済的援助		父からの非経済的援助		父への非経済的援助	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
各親の配偶者の生死										
健在										
死亡	0.01	1.01	-0.33	0.72	0.06	1.07	0.10	1.11	0.60 *	1.82
各親の学歴										
中学校										
高校	0.14	1.15	0.31	1.36	-0.22	0.80	0.56 **	1.74	0.09	1.09
短大・専門学校	-0.43	0.65	-0.54	0.58	-1.10 *	0.33	-0.47	0.62	-0.16	0.85
大学以上	-0.24	0.79	0.33	1.39	-0.50	0.61	-0.13	0.88	-0.41	0.66
各親の職業										
有職										
無職	-0.56 *	0.57	0.11	1.11	0.21	1.23	0.24	1.27	0.28	1.32
きょうだい数										
1人										
2人	-0.16	0.86	-0.25	0.78	0.05	1.05	0.17	1.19	-0.41	0.66
3人	-0.03	0.97	-0.38	0.68	-0.21	0.81	-0.25	0.78	-0.49	0.61
4人以上	-0.26	0.77	-0.40	0.67	0.32	1.38	-0.39	0.68	-0.66	0.52
出生順位										
長男										
次三男	-1.81 ***	0.16	-0.22	0.80	0.28	1.33	-0.41	0.67	-0.04	0.96
出生コーホート										
30-40年代生まれ										
50年代生まれ	-0.82 **	0.44	0.21	1.23	-0.23	0.79	0.39	1.48	-0.28	0.75
60年代生まれ	-1.98 ***	0.14	0.26	1.29	0.00	1.00	1.22 **	3.40	-0.68 *	0.51
70年代生まれ	-2.82 ***	0.06	0.33	1.38	0.07	1.07	1.43 **	4.18	-0.63 +	0.54
世帯収入										
500万円未満										
500-800万円未満	0.12	1.12	0.02	1.02	-0.32	0.73	-0.07	0.93	-0.24	0.79
800万円以上	0.47 +	1.60	-0.37	0.69	0.08	1.09	0.27	1.31	0.00	1.00
都市規模										
14大都市										
10万人以上の市	0.10	1.11	-0.14	0.87	-0.31	0.74	-0.12	0.89	0.03	1.03
10万人以下の市	0.78 *	2.18	-0.35	0.71	-0.47	0.63	-0.10	0.90	-0.10	0.90
町村	1.64 ***	5.15	-0.21	0.81	-0.58 +	0.56	-0.02	0.98	0.22	1.24
居住地域										
東日本										
西日本	-0.12	0.89	-0.18	0.83	-0.07	0.93	-0.14	0.87	-0.10	0.90
各親との同別居										
同居										
近居	-	-	-0.16	0.85	-0.61 *	0.55	-0.32	0.72	-0.41 +	0.66
遠居	-	-	0.03	1.03	-0.32	0.73	-0.84 **	0.43	-0.96 ***	0.38
定数	0.41	1.51	-0.66	0.52	-0.57	0.56	-2.20 ***	0.11	0.49	1.64
-2 Log Likelihood	621.35		798.11		701.23		633.64		832.71	
Model Chi-square	178 ***		23.27		25.20		53.34 ***		62.94 ***	
n	713		711		709		708		708	

注: +p<.1 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表5b 息子と母親との相互作用に関するロジスティック回帰分析

	母との同居		母からの経済的援助		母への経済的援助		母からの非経済的援助		母への非経済的援助	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
各親の配偶者の生死										
健在										
死亡	0.39 *	1.47	0.46 **	1.59	0.36 *	1.43	-0.05	0.95	0.48 ***	1.61
各親の学歴										
中学校										
高校	-0.40 **	0.67	0.06	1.06	-0.24	0.79	0.08	1.08	0.17	1.18
短大・専門学校	-0.58	0.56	0.26	1.30	0.01	1.01	-0.11	0.90	-0.63 +	0.54
大学以上	-0.44	0.64	0.46	1.59	-0.63	0.53	0.03	1.03	0.16	1.18
各親の職業										
有職										
無職	-0.53 **	0.59	-0.18	0.83	-0.11	0.89	0.07	1.07	0.02	1.02
きょうだい数										
1人										
2人	-0.04	0.96	-0.24	0.79	0.20	1.23	0.09	1.09	0.05	1.05
3人	0.11	1.12	-0.42	0.65	0.20	1.22	-0.17	0.84	-0.20	0.82
4人以上	-0.19	0.83	-0.74 *	0.48	0.63 +	1.87	-0.39	0.68	-0.16	0.85
出生順位										
長男										
次三男	-1.68 ***	0.19	-0.13	0.88	-0.08	0.92	-0.23	0.80	-0.17	0.84
出生コーホート										
30-40年代生まれ										
50年代生まれ	-0.22	0.80	0.79 ***	2.20	0.03	1.03	1.08 ***	2.96	0.01	1.01
60年代生まれ	-1.05 ***	0.35	1.43 ***	4.17	0.15	1.16	1.88 ***	6.55	-0.16	0.85
70年代生まれ	-1.78 ***	0.17	1.19 ***	3.29	0.40	1.49	2.07 ***	7.89	-0.46	0.63
世帯収入										
500万円未満										
500-800万円未満	0.16	1.17	-0.18	0.84	-0.09	0.91	-0.45 *	0.64	-0.48 ***	0.62
800万円以上	0.46 *	1.58	-0.26	0.77	0.39 *	1.47	-0.12	0.89	-0.11	0.89
都市規模										
14大都市										
10万人以上の市	0.36	1.43	-0.18	0.84	-0.18	0.84	-0.16	0.85	0.02	1.02
10万人以下の市	0.94 ***	2.56	-0.17	0.84	-0.18	0.84	-0.42	0.65	-0.13	0.88
町村	1.28 ***	3.60	0.11	1.11	-0.18	0.83	-0.16	0.86	0.20	1.22
居住地域										
東日本										
西日本	-0.15	0.86	-0.13	0.88	0.00	1.00	-0.21	0.81	-0.18	0.84
各親との同別居										
同居										
近居	-	-	-0.40 *	0.67	-0.22	0.80	-0.80 ***	0.45	-0.42 **	0.66
遠居	-	-	-0.38 +	0.68	-0.02	0.98	-1.16 ***	0.31	-0.97 ***	0.38
定数	-0.12	0.89	-1.26 ***	0.28	-1.28 ***	0.28	-1.65 ***	0.19	0.25	1.29
-2 Log Likelihood	1133.56		1128.87		1241.50		963.62		1406.79	
Model Chi-square	248.21 ***		75.87 ***		30.03 +		117.77 ***		95.14 ***	
n	1118		1112		1111		1114		1113	

注: +p<.1 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表5c 娘と父親の相互作用に関するロジスティック回帰分析

	父との同居		父からの経済的援助		父への経済的援助		父からの非経済的援助		父への非経済的援助	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
各親の配偶者の生死										
健在										
死亡	1.09	*** 2.97	-0.36	0.70	-0.31	0.74	-0.52	+ 0.59	0.26	1.30
各親の学歴										
中学校										
高校	-0.52	0.60	0.09	1.09	-0.04	0.96	-0.06	0.94	-0.15	0.86
短大・専門学校	-0.23	0.79	0.51	1.67	0.20	1.22	0.33	1.39	0.87	** 2.38
大学以上	-0.33	0.72	0.41	+ 1.50	0.04	1.04	0.43	+ 1.54	0.16	1.18
各親の職業										
有職										
無職	-0.22	0.80	-0.12	0.89	0.37	* 1.45	-0.32	+ 0.72	0.24	1.27
きょうだい数										
1人										
2人	-1.55	*** 0.21	-0.25	0.78	-0.33	0.72	-0.05	0.95	0.03	1.04
3人	-2.05	*** 0.13	-0.40	0.67	-0.18	0.84	-0.47	0.62	-0.15	0.86
4人以上	-4.08	*** 0.02	-1.46	*** 0.23	0.22	1.25	-0.81	* 0.44	-0.19	0.82
出生順位										
長女										
次三女	0.63	* 1.87	0.45	** 1.58	-0.13	0.88	0.10	1.11	0.08	1.09
出生コーホート										
30-40年代生まれ										
50年代生まれ	-1.25	** 0.29	1.62	*** 5.07	0.08	1.08	2.18	*** 8.80	-0.24	0.78
60年代生まれ	-0.96	* 0.38	1.47	*** 4.36	0.00	1.00	2.58	*** 13.14	-0.40	0.67
70年代生まれ	-1.61	** 0.20	1.89	*** 6.62	0.40	1.50	3.26	*** 26.17	-0.58	+ 0.56
世帯収入										
500万円未満										
500-800万円未満	0.14	1.14	-0.31	+ 0.74	0.31	1.36	0.12	1.12	0.06	1.06
800万円以上	0.21	1.23	-0.81	*** 0.44	0.30	1.35	-0.16	0.85	0.03	1.03
都市規模										
14大都市										
10万人以上の市	0.19	1.21	0.29	1.34	-0.07	0.94	-0.29	0.75	-0.02	0.98
10万人以下の市	0.78	+ 2.18	0.10	1.10	-0.51	+ 0.60	-0.62	* 0.54	-0.02	0.98
町村	1.04	* 2.84	0.06	1.06	-0.38	0.68	-0.53	* 0.59	0.15	1.16
居住地域										
東日本										
西日本	-0.07	0.93	-0.11	0.90	0.32	* 1.38	-0.38	* 0.69	0.04	1.04
各親との同別居										
同居										
近居	-	-	-0.63	* 0.53	-0.49	0.61	-1.23	*** 0.29	-0.58	* 0.56
遠居	-	-	-0.49	0.61	-0.55	+ 0.58	-1.79	*** 0.17	-1.09	** 0.34
定数	-0.40	0.67	-1.22	+ 0.30	-0.98	+ 0.38	-1.16	0.31	0.41	1.50
-2 Log Likelihood	403.49		1059.04		961.74		971.47		1160.51	
Model Chi-square	59.68	**	92.93	***	23.56		154.56	***	49.97	***
n	910		906		905		905		905	

注: +p<.1 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表5d 娘と母親との相互作用に関するロジスティック回帰分析

	母との同居		母からの経済的援助		母への経済的援助		母からの非経済的援助		母への非経済的援助	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
各親の配偶者の生死										
健在										
死亡	0.28	1.32	0.18	1.20	0.29 *	1.33	-0.03	0.97	0.32 *	1.38
各親の学歴										
中学校										
高校	0.06	1.06	0.16	1.17	0.05	1.05	0.41 ***	1.50	0.36 ***	1.43
短大・専門学校	0.10	1.10	0.52 *	1.68	-0.15	0.86	0.82 ***	2.27	0.08	1.08
大学以上	0.06	1.06	0.60	1.82	-0.48	0.62	-0.03	0.97	0.49	1.63
各親の職業										
有職										
無職	0.05	1.05	-0.29 +	0.75	0.41 *	1.50	0.16	1.17	0.31 *	1.36
きょうだい数										
1人										
2人	-1.27 ***	0.28	-0.13	0.88	-0.18	0.83	0.10	1.10	-0.09	0.92
3人	-1.58 ***	0.21	-0.40	0.67	-0.11	0.90	-0.13	0.88	0.00	1.00
4人以上	-2.82 ***	0.06	-1.05 ***	0.35	0.26	1.29	-0.43	0.65	-0.26	0.77
出生順位										
長女										
次三女	0.20	1.22	0.14	1.14	-0.23	0.79	-0.19	0.83	-0.04	0.96
出生コーホート										
30-40年代生まれ										
50年代生まれ	-0.41	0.66	0.93 ***	2.52	0.18	1.20	1.03 ***	2.80	-0.02	0.98
60年代生まれ	-0.46	0.63	1.16 ***	3.19	0.09	1.09	1.95 ***	7.00	0.01	1.01
70年代生まれ	-0.93 *	0.39	1.35 ***	3.85	0.26	1.29	2.75 ***	15.58	0.05	1.05
世帯収入										
500万円未満										
500-800万円未満	-0.10	0.90	-0.23	0.79	0.18	1.20	0.04	1.04	0.03	1.03
800万円以上	-0.04	0.97	-0.41 **	0.66	0.41 **	1.50	0.14	1.15	0.18	1.20
都市規模										
14大都市										
10万人以上の市	-0.29	0.75	0.20	1.22	-0.18	0.84	-0.03	0.97	-0.25	0.78
10万人以下の市	0.45	1.57	0.02	1.02	-0.18	0.83	-0.08	0.92	-0.09	0.92
町村	0.53	1.70	-0.05	0.95	-0.32 +	0.73	-0.24	0.79	-0.16	0.85
居住地域										
東日本										
西日本	-0.11	0.89	0.06	1.06	0.35 ***	1.42	-0.24 +	0.79	0.07	1.07
各親との同居										
同居										
近況	-	-	-0.29	0.75	-0.56 **	0.57	-0.85 ***	0.43	-0.18	0.84
遠居	-	-	-0.21	0.81	-0.63 **	0.53	-1.21 ***	0.30	-0.75 ***	0.47
定数	-0.94	0.39	-1.00 *	0.37	-0.90 *	0.41	-1.17 **	0.31	0.23	1.26
-2 Log Likelihood	662.36		1542.95		1591.09		1481.79		1772.83	
Model Chi-square	54.22 ***		131.23 ***		49.50 ***		309.64 ***		53.54 *	
n	1341		1334		1331		1332		1330	

注: +p<.1 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001